

東日本大震災の経験・教育を伝承する取組

保田 真理*・今村 文彦*・SUPPASRI Anawat*

1. はじめに

大震災から 2 年を迎えた。死者：15,883 名、行方不明者：2,681 名という甚大な人的被害、全壊 12 万 8,808 戸、半壊 26 万 9,871 戸、全半焼 297 戸、床上浸水 3,352 戸、床下浸水 1 万 7,459 戸、一部破損 74 万 0,185 戸の被害をあらためて振り返るとともに、われわれは当時何をしなければいけなかったのか、また、今後、われわれ研究者と地域がどのように連携して同じような災害を繰り返さないようにするかを考えなければならない。この最も重要な内容が、当時の体験・経験と教訓の整理および解析である。さらにこの事項を後世の世代に伝えること（伝承）である。今後も大規模な地震や津波が繰り返し起きる中で、今回の教訓を後世に語り継ぎ少しでも将来の防災・減災につなげなければならない。

教訓と経験を伝承するには、三つのステップがある。まず科学的、技術的な実態・原因の解明である。繰り返さないためには、やはり原因とその仕組みを知ることが必要である。そのことによって、次に抑えるためのヒントが生まれるわけで。次が、地域での減災である。完全に災害等を防いだり 100%低減することは困難であるので、命を守るという大前提の下に、何が多段階的にできるかを考えていく必要がある。最後は、このような知識やデータや知恵などを整理し発信し、要望に応じて提供することである。

東日本大震災では多くが津波による犠牲者であった。同じ悲劇を繰り返さないためには、震災の恐ろしさを鮮明に訴え続けるだけでなく、防災・減災への教訓、知識を伝えていくことが望まれる。当時の経験を記録すること、

遺構を保存するとともに、写真や映像、記録誌なども活用して、災害発生時に如何に生きる行動が出来るのかのヒントを得ることが肝要であると考えられる。さらに災害を体験し生き抜いた方の生の声は非常に説得力があることから「語り部」の仕組みづくりを創設する必要がある。

今回、津波の恐ろしさを嫌というほど再認識させられている三陸沿岸地域においても、また、大きな被害を出す結果となっている。どんなに悲惨な被害があっても、防災・減災の訓練・知識を伝える事を継続して行かない限り、その恐ろしさも時間の経過とともに風化し、忘れられ、再び大きな被害を受ける結果となっている。震災の事実を記録し伝え記憶を風化させないために、津波災害の実態を確実に訴え続けることが求められている。我々災害科学国際研究所の文理を融合させた総合的な調査と解析から、人間の本能として、あまりにも悲惨である記憶は脳が消去しようとする事象も解明されつつある。ゆえに、伝承にも工夫が必要である。人間の創意工夫次第で自然災害と共生し、上手に減災できる事を伝える必要がある。

2. 復興の理念

ここで我々の復興の原点を確認するためにも、復興構想会義の提言に示された原則を振り返りたい（内閣府,2011）。そこには以下が明示されている。失われたおびたしい「いのち」への追悼と鎮魂こそ、私たち生き残った者にとって復興の起点である。鎮魂の森やモニュメントを含め、大震災の記録を永遠に残し、広く学術関係者により科学的に分析し、その教訓を次世代に伝承し、国内外に発信する。さらに、被災地の広域性・多様性を踏まえ

*東北大学災害科学国際研究所

つつ、地域・コミュニティ主体の復興を基本とする被災した東北の再生のため、潜在力を活かし、技術革新を伴う復旧・復興を目指す。

以下に示す原則 1 から 7 の内容が心に響く。特に、原則 1 は、我々の研究の原点であると認識している。我々は、失われたおびたらしい「いのち」への追悼と鎮魂のために災害を繰り返さない決意が必要である。ここでは、被災地の広域性と多様性を踏まえた地域・コミュニティが主体であり、潜在力を活かし、技術革新を伴う復旧・復興が不可欠である。復興への糸口は「つなぐ」、絆（きずな）、であり、個人や地域を「むすぶ」結（ゆい）の精神を再認識する事にあり、我々人間は独りで生きてきたのでは無く誰かに支えられ生きてきた事を自覚する必要がある。

原則 1；復興の原点（追悼と鎮魂）と教訓の
伝承・発信

原則 2；広域性と多様性、国の役割

原則 3；潜在力を活かし、技術革新を伴う

原則 4；災害に強い安全・安心のまち、自然
エネルギー活用型地域（自立・分散
型社会）

原則 5；被災地の復興無くして日本経済の再生はない

原則 6；原発事故の収集と被災地への支援と
復興

原則 7；国民全体の連携と分かち合いによる
復興を推進

3. 船渡市大船渡津波伝承館

<http://ofunato-tsunami-denshokan.jimdo.com/>

3.1 伝承館の発足

平成 25 年 4 月 20 日に、三陸沿岸部での被災後の地域での復興に向けた活動調査の一環で、津波防災啓発などの活動視察を行った。この代表的施設である大船渡市津波伝承館を紹介する。

東日本大震災を経験し、多くの教訓を語り継ごうと、平成 25 年 3 月 11 日に津波伝承館が開館（仮オープン）された。齊藤賢治（さ

いとう製菓専務、65 歳）さんら市民有志が昨年 8 月に立ち上げた一般社団法人「大船渡津波博物館」が計画したものがある。写真展示のほか、齊藤さんが避難時に撮影した記録映像の上映、震災体験者の語りなど、来館者が直接、津波の脅威を感じられるように工夫が凝らされていた。この伝承館には 2 つのプログラムがある。始めは、語り部さんによる津波映像の解説と被災体験談の紹介である。齊藤さんが、地震時から津波来襲時（地震発生時の様子・すぐに高台避難した状況・途中で車渋滞状況・避難場所で見えた来襲状況）、さらに、その後の避難生活体験、工場再開までの道のり、工場再稼働の様子等、多彩な内容になっている。

3.2 さいとう製菓の歴史

三陸沿岸では歴史的に、明治。昭和。チリの 3 つの地震津波により甚大な被害があり、ここでの経験を今後の防災に活かそうという活動が地域で行われて来た。齊藤さんの父親が大船渡市に移住したのが昭和 8 年であり、この 3 月 3 日に、昭和三陸地震津波が発生し、父親は津波に流されながらも電柱によじ登り、九死に一生を得た。これ以降、父は家族や周辺に「津波の怖さ、恐ろしさ」を常に語っていた。齊藤さん自身、12 歳の時にチリ津波を体験している。大船渡市はこの際にも甚大な被害を出している。

3.3 伝承の取組（プログラム）

地震直後に、齊藤さんの「地震だ、津波が来る、逃げなさい」のかけ声とともに、さいとう製菓の従業員のみなさんが旧本社から高台までにげた避難路を通して避難体験をする。さらに、震災遺構を語り部さんと歩く機会もある。津波浸水域には、津波により被災した建物などが残っているところがあるので、このツアーでは、主に津波により壊滅的な被害を受けた旧さいとう製菓本社や津波が来た時のままでとまっている時計台などを、語り部さんと歩くことができるそうだ。（所要時間 30 分程度）。



写真-1 大震災前と後のさいとう製菓専務の様子



写真-2 大船渡津波伝承館



パネル展示被災前後

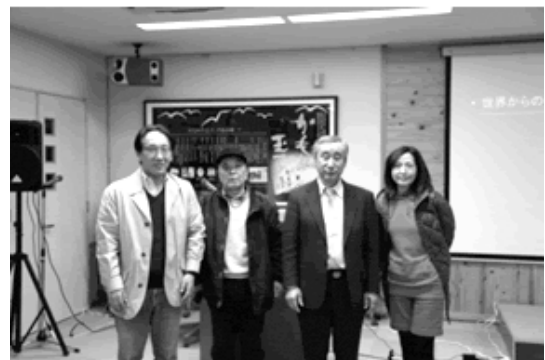


写真-3 震災遺構を語り部さんと歩く (HP より), 齊藤賢治さん (右から二番目)

4. 釜石市宝来館での活動

場所：釜石市宝来館 <http://houraikan.jp/>

4.1 震災時の様子

釜石市鵜住居町根浜海岸にある宝来館は 2011 年東日本大震災以前から津波に対して強い警戒心を持った女将の岩崎昭子さんが万が一の時は観光客や地域の皆さんが避難できる事を想定して作られた鉄筋コンクリート 4 階建ての丈夫な建物(津波避難ビル指定)だった。しかし岩崎さんは、建物だけでは心配だと裏山にも自前で避難路を作っていた。その対策が今回の震災で活かされ多くの命を救う結果となった。岩崎さんは、危険を知らせるために地区の半鐘を鳴らし続けていた男性に目前に迫っている津波を知らせるために、避難していた山を下りて知らせに行き、避難路に上がる直前に津波に一度は飲まれたが九死に一生を得た。助けに行った男性も旅館に避難し助かった。事前の準備が活かされた顕著な例として紹介したい。

4.2 宝来館の建物について

平成 5 年に北海道南西沖地震津波の被災を報道で見て、父親が経営していた旅館を津波でも耐えうる強いものにしたいと考えた。平成 7 年に新館を新築、避難ビルとして機能する鉄筋コンクリートの建物にした。さらに、それだけでは不十分と考え、独自に裏山に避難路を切り開いた。平成 15 年に東北大学津波工学研究室と津波避難のためのワークショップを行った(安倍ら, 2004)。その後も周辺住民と避難訓練を重ねていた。

4.3 震災の経験と復興への動き

そして平成 23 年に東日本大震災を経験した。旅館は 1 階の天井裏まで浸水したが 2 階部分は窓を閉めて障子を閉めていた所の畳は濡れていなかったようだ。4 階、3 階部分を解放して、臨時的避難所を開設した。約 120 名の避難者が共同生活をしたが、その後、余震も多く危険があるとのことで、3 月 26 日

に市の指導で解散した。岩崎さんによると、共同生活の中では、誰が言うでもなく、各自できる分野で役割分担をし、ルールも作っていった。全員の自主的な活動で快適な避難生活を送る事ができた。その後住民は指定避難所へ移動。みんなの気持ちは「働きたい」が一番であったので、手に入る材料で山カフェをはじめた。それは、モノを貰う生活より、自分たちで働いて現金を稼ぎたいと皆が思ったからである。(1000 円で食事を販売しようとしたが、被災者からお金を取るのかと非難され辞めた。)自分たちの前に進みたい思いと、心が癒えない避難者とのギャップがあったと感じたという。

そこで、浜の使えなくなった漁網を使って、ミサガを作り、広告代理店やテレビ放送局の協力を得て販売をし、現金収入を得る事が出来た。砂浜がれき撤去は全国からのボランティアさんも含め、地域の人全員で行った。台湾から生活資金支援があり、とても助けられた。他にも、マレーシア、アメリカなど多くの国から支援をいただいて助けられた。

以上の国内からのボランティア、海外からの支援があった為、平成 24 年 1 月 5 日に宝来館の営業を震災後再始動した。建物の前にある白い正方形は震災後に建てられた津波による漂流物を防ぐフェンスである。全優石寄贈による 2011 年津波津波の石碑も、宝来館前のビーチの海岸林に設置している。慰霊の鐘設置(平成 24 年 8 月上旬)。これは釜石北高校の恩師や震災で家族を亡くした同窓生により敷地内に設置された。8 月 12 日には、世界的指揮者佐渡裕さん＋スーパーキッズ・オーケストラが震災・鎮魂の演奏会を実施した。根浜地区に残った松林の中での演奏会となり、これを契機に、地元の子どもたちが音楽に興味を持ち、楽器の支援を受けて、演奏するようになった。さらに、ラグビー繋がり、ニュージーランドへホームステイの実施を行うことができた。現在は 2019 年にラグビーワールドカップ開催誘致の運動を始めている。ニュージーランドへ行った子どもたちが英語を話し、ワールドカップ関係者のお世

話を出来るように育ってくれる事が今の夢であると語っていた。



写真-4 避難してくる女将さんの様子



数分後津波が来襲した様子



写真-5 宝来館の前にある2011年津波の石碑



石碑に書かれたメッセージ



写真-6 津波避難ビル指定宝来館



宝来館から山への避難路



写真-7 高台から見た宝来館（標高約 30 メートル）



岩崎昭子さん（左から二番目）

5. おわりに

大船渡市の齋藤さんの津波伝承館の取り組み、釜石市根浜の岩崎さんの取り組み、いずれも、未曾有の大震災を経験し、自然災害の猛威を目のあたりにし、体験しながらも、たくましく生延びた力を、後世の世代へのメッセージに替えて、どんな状況になっても命を守り、地域を守る大切さを教えてくれている。

我々は、その大きな意思を側面から応援し、語り継ぎ啓発して行く活動に邁進して行く義務があると感じた。日本の次世代だけではなく、世界各国の次世代が、多くの経験を学び、減災を実践して行く事で、地球規模の減災が実現される日を目指して、彼ら、彼女らとともにしっかりと減災のすべを発信して行きたい。

参考文献

安倍祥・今村文彦・牛山素行（2004）：住民参加による津波対応防災マップの作成とその課題，土木学会東北支部技術発表会（II-31），pp.170-171.

今村文彦，安倍祥，牛山素行（2005），住民参加による津波対策の取り組み－地域参加型ハザードマップ作成を

<http://www.disaster.archi.tohoku.ac.jp/symposium/forum3/imamura.pdf>

大船渡津波伝承館 <http://ofunato-tsunami-denshokan.jimdo.com/>

https://www.facebook.com/?ref=tn_tnmn#!/ofunato.tunami.denshokan/info

内閣府，東日本大震災復興構想会議，復興への提言－悲惨のなかの希望，2011年6月25日 <http://www.cas.go.jp/jp/fukkou/pdf/fuk-kouhenoteigen.pdf>

宝来館 <http://houraikan.jp/>